

# 簀（おぼつかなし）考

——国字の生成と消滅——

八木 みどり

## 〔抄録〕

形容詞「おぼつかなし」の用字として現在では「覚束なし」が使われることが多いが、鎌倉時代に成立し、その後さまざまな人びとによって改変され、増補されていったとされる平家物語諸本ではこの語が数種類の文字で表わされている。その中に辞書などにもあまりみられない「簀」という文字がある。管見では現存作品のなかでは平家物語諸本でしか見ることができない。また字書類の中では鎌倉時代に成立したと考えられる『字鏡集』を初見として、江戸時代後期には日常つかう字書から消えてしまう。倭字は、字書では慣

習的にその文字の出典を書かない傾向があるのでその来歴が不明であることがある。本稿ではこの「簀」という文字がどのようにして生まれ、倭字として成立し、消えていったのかを、中国、韓国、日本の古辞書、また平家物語諸本から探ってみたい。

（本稿では国字という語の代わりに、日本で作られた漢字に似た文字をあらわすことを明確にするために倭字という語を用いることにする。）

**キーワード** おぼつかなし、平家物語諸本、国字、倭字、字鏡集

## 一、はじめに

たとえば、『四部合戦状本』では、「光耀（キラメイテ）」、「驤（ヤツシ）」、また『源平闘諍録』では「𪛗（サヤケク）」、『真字熱田平家物語』では「暗（キク）」、『南都異本平家物語』では「目睡（マドロメバ）」、「波浪々々泣（ハラハラトナク）」などのように平家物語諸

本では、独創的かつ魅力的な宛字で、視覚的にもその意を通じやすくする工夫がなされている。

そうした一例ではないかとおもわれるものに『延慶本平家物語』の中でつかわれている「穴倉」という文字がある。

吉澤義則校注『応永書写延慶本平家物語』の解題では、「今本書中にみえる異體の假名、及異體文字等今日より見て奇異に見ゆるもの」



- ・ 寤 齋 愷 不 審 無 覺 束

- ・ 寤 平松文庫蔵『真名本平家物語』<sup>10</sup>  
 (「熱田本と同時代か。」「熱田本」玉井幸助解説)<sup>9</sup>  
 彰考館蔵『南都異本平家物語』<sup>11</sup>  
 (室町時代書写)

- ・ 覺 束 国書刊行会『長門本平家物語』<sup>12</sup>  
 (赤間本は仮名)<sup>13</sup>  
 国学院大学蔵『屋代本平家物語』<sup>14</sup>  
 (応永頃書写か)

ここで使われる「不審」、「齋」また「万葉集」で「オボボシ」(ぼんやりとしてはつきり見えない。気持ちがふさいではれない義)として使われている「齋愷」や「愷」はそれぞれの漢字がもとと持っている義から採用されたことが理解できる。また「無覺束」、「覺束」、「覺塚」では「覺」が「覺す(オボす)」という使用頻度の高い訓をもち、「束」や「塚」はそのまま「ツカ」と読めることから、その音から採られたことはまちがいないだろう。

しかしこうした「おぼつかなし」の用字のなかで『源平盛衰記』諸本、『真字熱田本平家物語』、『南都異本平家物語』で使用されている「寤」は、先に参照した『時代別国語大辞典』や『大漢和辞典』、『角川古語大辞典』<sup>15</sup>などにもみられず、どういう来歴を持つ文字なのかわからない。

この「寤」の字形から「穴倉」と関係をもっていることが考えられそうである。また成實堂文庫本『源平盛衰記』で三例の用字例をもち、

平松文庫蔵『真名本平家物語』で一度だけ使用される「寤」も同時に観察していきたい。

尚、この稿の影印などの出典は最後の頁にまとめて(注)として示した。

## 二、字書のなかの「寤」と「窘」

まずこれらが日本で作られた文字であるかどうか考えるために、中国や韓国の字書を検討する。

清代に勅撰された正統的な字書である『康熙字典』<sup>17</sup>では「穴部」の文字のなかに「窘」はみられない。しかし「窘」はその字義を「窮迫也 急也 困也 又仍也」とされ、載せられる。

またより多くの字数をもつ金代の『五音類聚四聲篇海』<sup>18</sup>や異体字を多く載せる『龍龕手鑑』<sup>19</sup>にも「窘」は「困也 急也」、また「急迫也」とその字義がかかれるが、「窘」はみられない。「窘」は漢字であるが、「窘」が中国で作られた文字ではないことが考えられる。

また韓国で作られた可能性をみてみると、これは現代に作られた字書ではあるが、『説文解字』から韓国の訛字まで典拠をあげて記載した檀国大學校出版部発行『漢韓大辭典』<sup>20</sup>でも「窘」は載るが「窘」はない。韓国で作られた文字でもないようである。

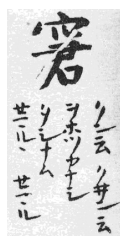
しかしあくまで「窘」が中国や韓国で作られた文字である可能性が低いと推測される点には留意したい。笹原宏之著『国字の位相と展開』<sup>21</sup>51頁では次のように述べられている。

字書類に採用されない中国、日本、朝鮮などの莫大な量の文字資料のすべてを調べる事ができたとしても、他に二度と見るのできない圧倒的な量の散逸文献や、改変を受ける前の文献の確認不能事態などのために、細かな史実が判明しないことは避けられない。こうしたことにより、個々の字では、その来源が確定しがたいことが少なくなく、大概是中国と日本の現存資料同士の比較に基づく推測にとどまらざるをえない。

次に日本の古辞書で「窳」および「窳」の掲載状況をみたい。字体の観察も重要と思われるので、必要に応じて影印を見ることがする。

『新撰字鏡』<sup>22</sup>に「窳」は未収載。『類聚名義抄』<sup>23</sup>では「窳」は「コマル・フサグ・タシナム・セム・シメヨル・キハマヌ」として訓も載るが、「窳」をみることはできない。

『世尊寺本字鏡』ではともに見ることができないが、室町時代書写とされる『音訓篇立』<sup>24</sup>では「ヲホツカナシ」の訓をもつ「窳」が収載されている。



〔天下 穴篇・第三冊 三ウ〕

『音訓篇立』と『世尊寺本字鏡』の関連について、山田忠雄「延徳

本和玉篇と音訓篇立・世尊寺本字鏡」（『本邦辭書史論叢』、三省堂）では、残っている『世尊寺本字鏡』六十三部首が、『音訓篇立』の一部と完全に一致すること、また篇目の順序が同じことから、『音訓篇立』は原本『世尊寺本字鏡』の抄録であると推定されている。穴部は『世尊寺本字鏡』に残っていない部分であり、『音訓篇立』には、「ヲホツカナシ」の訓をもつ「窳」が載せられていることから原本『世尊寺本字鏡』に「窳」が「ヲホツカナシ」の訓とともに収載されていた可能性が考えられる。

「窳」を初めてみるのできる古辞書は『字鏡集』諸本である。山田忠雄「字鏡鈔と字鏡抄」、貞刈伊徳「注文から見た字鏡鈔・字鏡集の考察」（ともに前出『本邦辭書史論叢』<sup>25</sup>）によると、原初本『字鏡抄』は鎌倉時代中期には成立していたと考えられ、検韻を目的として編まれ、標出字が四声韻目順に配列されていたと考えられている。その原初本『字鏡抄』から数度の改訂をうけた後、書写されたとされる『永正本字鏡抄』から、『龍大本字鏡集（和玉篇）』、『寛元本字鏡集』という七卷本字鏡集が生まれる。また原初本『字鏡抄』から韻目順の標字である卷三、四、五を受け継ぎ、改編本から字形類似順の標字の卷一、二、六を受け継いだ『天文本字鏡鈔』から『応永本』、『白河本』という二十卷本字鏡集が成立したとされる。

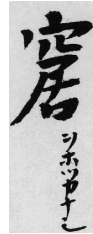
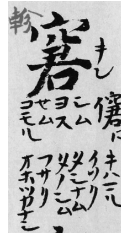
七卷本系統にも二十卷本系統にも同様に「窳」・「窳」が掲載されることから原初本『字鏡抄』にも掲載されていたことが考えられる。

しかし穴部の載る部分は、標出字を字形の類似によって排列した地

儀部であることから、原初本『字鏡集』を改訂した一本から出ているとも考えられる。また秋本守英編『字鏡集』<sup>(29)</sup>下、まえがきによると『字鏡集』は、後世よく用いられた『倭玉篇』の成立に大きい影響を及ぼしたとされる。

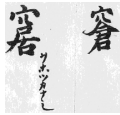
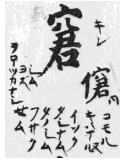
『字鏡集』の諸写本をみてみたい。

永正五年写本とされる尊経閣文庫蔵『永正本字鏡抄』<sup>(26)</sup>。「穴部」で「オ(ヲ) ホツカナシ」の訓をもつ文字は「窶」と「窟」であり、「窶」は収載されるも、音訓はつけられていない。後述のために「窟」も同時に観察したい。この文字も『康熙字典』などでみることができない。



〔廿・穴部〕

尊経閣文庫蔵『天文本字鏡鈔』<sup>(27)</sup>では「窶」の訓の位置が移動、「ヲ ヲツカナシ」となっている。天文十六年に表紙を修補と識語。



〔卷一 穴部〕

『寛元本字鏡集』<sup>(28)</sup>では「寛元三年四月二日小川法印承<sup>(28)</sup>示云朱點東宮切韻墨韻唐玉篇也自支韻至于灰哈又舌内也 寛元三年五月十日尚成云墨點不窶字也朱點詳之無不窶字也」と識語があることから『寛元本』

とよばれるが、江戸時代後期の考証学者、狩谷掖斎自筆校正書入。「窶」に「白无」の識語。訓の位置の移動の他は『永正本』と同じである。

『龍大本字鏡集(和玉篇)』<sup>(29)</sup>七巻本でも「窶」に識語・音訓はなく、「窶」に関しても『永正本』と同様であるが、「ヲホツカナシ」の訓をもつ「窟」は、「窟」へ変化している。

尊経閣文庫蔵『応永本字鏡集』<sup>(30)</sup>(二十巻本)では興味深い誤記の例が見られる。応永二十三、四年写とされる。



〔卷四 地儀部 下 穴部〕

最初の文字の右傍に、間違いを表わすと思われる「ヒ」が書かれ、下に「窶」の字が書かれている。上の文字は「窶」を「窶」と書き、直したが、正確に書くべきと考え、下に書き直したことが推測される。書写者にとって「窶」が書き慣れない文字であり、「窶」と間違いやすい文字であつたことが想像される。

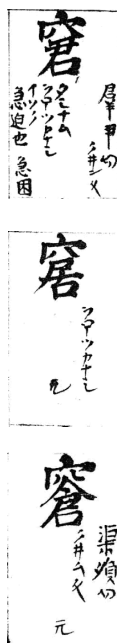
室町中期写本『白河本字鏡集』<sup>(31)</sup>ではこれまでの『字鏡集』諸写本とは違い、「窶」は載せられていない。底本としたものに音訓の記載が全くないため、幽霊文字と考え、整理したことを示すかもしれない。しかし同じ穴部に「窶」という音訓のない文字が収載されていること



から他の理由も考えられる。

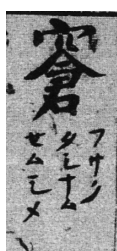
次に倭玉篇とよばれる字書についてみたい。

室町時代中期書写と推定される倭玉篇『篇目次第』<sup>(32)</sup>では次のようである。  
 第二十三 穴部 七十六ウ



「寤」「瘡」に「ヲヤツカナシ」の訓がみられ、また「寤」には反切、音がつけられているが、音は「寤」と同じ。典拠がないのでどこからきたものか不明。また中田祝夫・北恭昭著『倭玉篇夢梅本篇目次第研究並びに総合索引』解説によれば「无」は、『大公益会玉篇』にないという意とするが、また「无」と表記された文字は『玉篇』以外の文献によるもののほかに、国字も含まれるものと考えられるが、さらに調査がひつようである」とされる。

同じ室町中期頃写本である倭玉篇『拾篇目集』<sup>(33)</sup>では興味深い現象がみられる。



〔中 穴 第五十〕

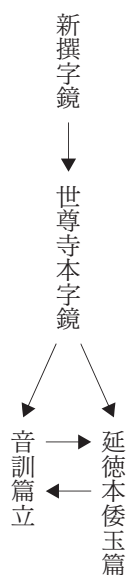
「寤」の訓として、元来「寤」の訓であった「フサク」「タシナム」などが書かれている。「寤」は載せられていない。「寤」が「寤」と混同

された一例であろう。『篇目次第』で「寤」につけられた音も「寤」と「寤」の混同から付けられた可能性がある。

また『弘治二年本倭玉篇』<sup>(34)</sup>では『篇目次第』と同様「寤」に、元来の訓である「タシナム」と、「ヲホツカナシ」が併記され、「寤」は載せられない。

同様に『慶長十五年版倭玉篇』<sup>(35)</sup>でも「寤」に「タシナメラル・ヲボツカナシ・セマル」と訓があり、「寤」は収載されていない。

前述のように山田忠雄氏は『音訓篇立』が『世尊寺本字鏡』の抄略であるという説を立証された。また前田富祺「延徳本倭玉集」について「および山田忠雄「延徳本倭玉篇と音訓篇立・世尊寺本字鏡」（共に『本邦辭書史論叢』<sup>(25)</sup>）において『新撰字鏡』から『音訓篇立』に至る次のような漢和字書の系譜をあきらかにされた。



そうした漢和字書の系譜を踏まえ、北恭昭氏は『音訓篇立』と『慶長整版・倭玉篇』について詳細に検討された結果、『世尊寺本字鏡』の内容がなんらかの媒体を介して『慶長整版・倭玉篇』に反映している事実を確認され、また『慶長整版・倭玉篇』が『音訓篇立』の抄略であることを推論された（『漢和字書の系譜における慶長整版倭玉篇』、『国語学』<sup>(36)</sup>77）。『慶長十五年版倭玉篇』に載る「寤」の訓も『音

訓篇立』の影響と考えられるかもしれない。

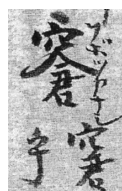
『下学集』諸写本では「窘」、「窘」ともに未収載。「闇」、「無覚束」に「ヲホツカナシ」の訓。

室町時代末期の写本と考えられる『色葉字訓』<sup>(27)</sup>には「窘」に「おほつかなし」の訓がつけられている。

『文明本節用集』<sup>(38)</sup>ではじめて「窘」に「オボツカ」の訓が付けられた例を見ることが出来る。「又作」として細字で書かれ、多用されていない文字であったことが想像される。ここでは「窘」はとられていない。  
(222)<sup>(39)</sup>



『黒本本節用集』<sup>(40)</sup>は『印度本節用集古本四種並びに総合索引』<sup>(42)</sup>序によると、橋本進吉博士によって「応仁文明が遅くとも享禄天文を下らぬ」ところに書写され、また『和漢通用集』と共通の粗本をもつと推定されている。「窘」以外には「無覚束・不審・魁怙」が「ヲホツカナシ」の訓をもつ。



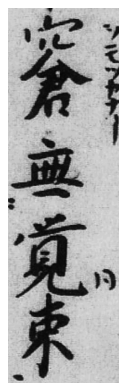
「27ウ 遠言語」

「窘」を「窘乎」と識語がある。出自のあきらかでない「窘」の文字を、漢字「窘」の異体字もしくは誤記と認識していく様子と推測される識語である。

室町時代書写とされる『伊京集』<sup>(41)</sup>では不鮮明ながら「窘」に「ヲホツカナシ」の訓がみられる。この『伊京集』では、「オボツカナシ」の訓をもつ漢字に「無覚束・不審」以外に「骨」が見られる。

『永禄二年本節用集』<sup>(42)</sup>では「窘」に「ヲホツカナキ」、「覚束」に「ヲホツカ」、「不審」に「ヲホツカナシ」また「イブカシ」とある。

『慶長九年本節用集』<sup>(43)</sup>では「窘」に「ヲモツカナシ」、また「無覚束」に「同」とあり、「魁怙」に「ヲホツカナシ」、「不審」に「オボツカナシ」、「未審」に「同」と訓をこまかく分けて記す。この現象はこれらの文字に典故があることを想像させる。また「窘」が「ヲモツカナシ」の筆頭になっているが、ここでは、「突」の下が「君」になっている、『慶長古活字本源平盛衰記』のような古活字本から取材している可能性を感じさせる。



(8<sup>39</sup>)

元和寛永頃写とされる『和漢通用集』<sup>14</sup>では行書体で「寤」に「おぼつかなし」の訓。各文字の下に字義がかかれるが、「魁怙」、「寤」ともに「おぼへなきこと」と記され、同義として使われていたことがわかる。

また『節用集大全』<sup>45</sup>では標出字が行書体で大きく書かれ、その下に少し小さく横書きに楷書で同じ文字が書かれる。「をほつかなし」の訓をもつものは六例挙げられる。無臚、覚束、不審、寤、闇、鬱の順である。この『節用集大全』は延宝八年に版行され、解題によれば「後刷もみな同一版木を使用」、「室町時代以来の旧い形式を脱し、新しい編集を求めようとしたもので、語彙は三万以上に上る。」とされる。かなり広く流通したようで解説付記には『柳亭記』にもその名を見ることが出来たことが書かれている。

以上の例から、「寤」や「寤」が室町時代中期から江戸時代初期にかけて日常で使われる字書でよく見られるようになっていたことがわかる。これらの文字が人目にふれやすくなってきていたことを表わしていることが考えられるが、これは木版活字などで『源平盛衰記』などが出版され、庶民にもよく読まれるようになっていたことと関連があるかもしれない。

多くの字書では楷書で書かれるが、写本などで行書や草書で書かれたとき、「寤」が他の文字、例えば「寤」と見間違える可能性が考えられる。『字鏡集』や『篇目次第』で見られた「寤」も「寤」の訛字ではないかとも考えられる。また元禄十一年出版の『書言字考節用集』<sup>46</sup>では「寤」が「ヲボツカナシ」の訓をもつ。



「言辭 八上 27才」

『龍龕手鑑』<sup>19</sup>によれば「寤」は、「星宇、天子所居也」とあり、義が「おぼつかなし」と全く関連しないことから、「寤」の書写された文字を、見間違えた可能性が考えられる。またこの文字の出典を『盛衰記』とある。管見では現存する『源平盛衰記』にその用例をみることができない。

この『書言字考節用集』は広く使われたもののようで、中田祝夫編『書言字考節用集』序によれば、「江戸時代の多くの作家の庖厨には書言字考が備わっていたのであろう。」また「この辞書が盛行したということは、元禄時代及びその後の江戸時代を通じて、単に文芸の面だけでなく、社会全体の言語文字の生活に大きな関りを持っていたということを意味する。」とある。

この辞書に「寤」が見られないということは、江戸時代中期、この文字が忘れ去られつつあることを意味し、その後「オボツカナシ」の用字は、現在も時々使われる「覚束なし」へと集約していく。江戸時

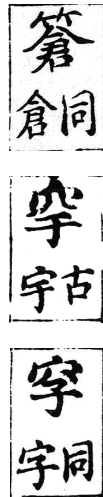


代中期以降成立し「窳」の文字を使った作品を管見ながら発見できていない。

つぎに「窘」と「窳」の関係について考えてみたい。

ここまで『古辞書』の影印を観察してきて、形からこの二つの文字がよく似ている文字であることは疑えない。また『応永本字鏡集』の書き誤り、『拾篇目集』での「窘」の持っていた訓がそのまま「窳」につけられるなどの現象が、「窘」と「窳」が同一視された可能性の証左になるかもしれない。

また参考として元禄五年以降に刊行されたと考えられている『異體字辨』<sup>⑦</sup>を見てみる。「同」と書かれているものは同じ字義であり、正誤は問わない形式をとっている。また「古」は「古くは横に書かれた文字を使っていた」意である。漢字の使用に関して、現代のように正誤の峻別はなかったのである。

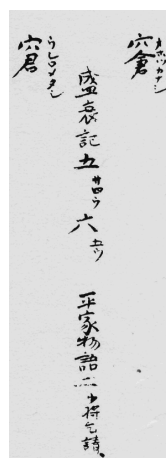


また語義からみると、「窘」は前記のように字義を「窮迫也 急也 困也 又仍也」とされ、「窘窮・くるしみ行きつまる」などと使われ、日本の用例を一例みれば、『日本霊異記』<sup>⑧</sup>で「窘」を「セムル」と訓み、「悪い事が迫ってくる」義となっている。『類聚名義抄』には「フサク、タシナム、セム」とある。上代の「タシナム」について『時代

別古語大辞典・上代編』でみると「苦しむ」義になっていて、「窘」を不幸な状態に置かれた時の心理を形容する漢字と捉える事ができる。出自のはっきりしない文字より漢字を使いたいとする意識が、「窘」が「窘」であろうという推測を生み、形の類似と義がやや近いという点から「窳」が「窘」に比定されていたと考えられる。

### 三、「穴倉」と「窘」

字書の最後に、『寛元本字鏡集』校正・書写者である狩谷掖斎の弟子であった、幕末の国学者岡本況斎（保孝）の著した『倭字攷』<sup>⑨</sup>をみたい。況斎の考える「倭字」の定義は「和字・省字・本邦誤用・二合字・片假字・轉用・誤字・假借」と八分類されているが、『異体字研究資料集成』第九巻の杉本つとむ氏解説によるとそれぞれの区別があまり明確ではないとされる。



「31才」

況斎は「窘」を「オホツカナシ」と訓み、「窘」を倭字と考えていた事がわかる。「窘」を「ウシロメタシ」とするが、この「窘」は況斎が資料にしたと考えられる『康熙字典』や『龍龜手鑑』に収載されていることは先に見てきたので、これは倭字というより国訓と考えて掲載したものと考えられる。

また「寤」にはその典拠が書かれている。

『倭字攷』にしたがつて、慶長古活字本『源平盛衰記』巻五と巻六の用例をみると、巻五に二例、巻六に二例、「寤」の用例がみられる。そのうちの一例をみたい(付訓は後のもの)。

事ノ様後イカ、ト寤<sup>フボツカテ</sup>

〔巻第六ウ〕

(事ノ様 後イカ、ト 寤<sup>フボツカテ</sup>シ)

この慶長古活字本『源平盛衰記』では先に記したように、「寤」ではなく、「突」の下が「君」になっている。しかし「倉」の文字も「倉」とあり、「倉」と「倉」の間に区別がない。木版活字の制約からであろう。

次に『平家物語』をみてみる。『平家物語』巻第二には延慶本、長門本では「オホツカナシ」の用例は二例、覚一本系には一例あるが、ともに「寤」の用例はなく、況斎は現存以外の本を見たものと考えられる。

管見では、平家物語諸本で「寤」の用例をもつものは、『源平盛衰記』、『南都異本平家物語』、『真字熱田本平家物語』である。『真字熱田本平家物語』は巻一以外は覚一本系であるが、巻二では「鬱」が使われている。

『南都異本平家物語』は、零本(巻十のみ)であるが、「寤」の用例が五例みられる。そのうち四例の語句が、『南都異本』と関係がふかいとされる『延慶本平家物語』とおおよそ一致する。二例ほどあげて

比較してみたい。

①は『延慶本平家物語』、②は『南都異本平家物語』である。また章段名は北野保雄・小川栄一編『延慶本平家物語』<sup>(50)</sup>による。

① 遥<sup>ニ</sup>様<sup>ニ</sup>御事<sup>ニ</sup>誠<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>苦<sup>ニ</sup>奉<sup>ニ</sup>思<sup>ニ</sup>候<sup>ニ</sup>

(通<sup>ニ</sup>旅<sup>ニ</sup>立<sup>ニ</sup>セ給<sup>ニ</sup>へ 穴<sup>ニ</sup>倉<sup>ニ</sup>ハ奉<sup>ニ</sup>思<sup>ニ</sup>トモ)

延慶本「池大納言関東へ下給事」〔五七ウ〕

② 立<sup>ニ</sup>遥<sup>ニ</sup>旅<sup>ニ</sup>御事<sup>ニ</sup>誠<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>苦<sup>ニ</sup>奉<sup>ニ</sup>思<sup>ニ</sup>候<sup>ニ</sup>

(立<sup>ニ</sup>遥<sup>ニ</sup>旅<sup>ニ</sup>御事<sup>ニ</sup>誠<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>苦<sup>ニ</sup>奉<sup>ニ</sup>思<sup>ニ</sup>候<sup>ニ</sup>) 南都異本「五〇ウ」

『延慶本』の用例では「穴倉」に本文と同じと思われる手で「ヲホツカナク」の訓が書かれている。

① 暫<sup>ニ</sup>カクテ御坐<sup>ニ</sup>カシト宣<sup>ニ</sup>ケレトモ

(暫<sup>ニ</sup>カクテ御坐<sup>ニ</sup>カシト宣<sup>ニ</sup>ケレトモ 京都ニモ 穴<sup>ニ</sup>倉<sup>ニ</sup> 思<sup>ニ</sup>ラム)

延慶本「池大納言帰洛之事」〔五八ウ〕

② 暫<sup>ニ</sup>此<sup>ニ</sup>坐<sup>ニ</sup>宣<sup>ニ</sup>都<sup>ニ</sup>寤<sup>ニ</sup>思<sup>ニ</sup>候<sup>ニ</sup>

(暫<sup>ニ</sup>此<sup>ニ</sup>坐<sup>ニ</sup>宣<sup>ニ</sup>都<sup>ニ</sup>寤<sup>ニ</sup>思<sup>ニ</sup>候<sup>ニ</sup>)

南都異本「五十一才」

また『南都異本』は巻十末部分が欠落しているが『延慶本平家』巻

十末には、一文字ではないかと思われる「穴倉」がみられる。

自言付モ絶ヌ程 経レハ 如何ニト 穴倉ク 覚ス

(自言付モ絶ヌ程

経レハ

如何ニト

穴倉ク

覚ス)

延慶本「惟盛ノ北方歎給事」〔五九才〕

『延慶本平家物語』では「穴倉」をもって「オホツカナシ」とするが、並べて観察してみるとわかるように、「窶」は「穴倉」の二字を合字することによって出来上がった文字であるらしい。そしてそれは況斎が考えたように「窶」が日本で作られた文字、倭字であることを意味する。

現在の字書で「窶」を載せ、倭字とするものに『広漢和辞典』<sup>51</sup>がある。訓を「おぼつかなし」と載せるがその典拠は明らかにされていない。また『国字の字典』<sup>52</sup>（東京堂出版）は況斎の『倭字攷』をその典拠とする。

#### 四、まとめ

『熱田本平家物語』<sup>9</sup>が「覚一本系統の平家物語を何人かが真字書きに改めて経文書写の例に倣い一行十七文字に整理して書写した（玉井幸助解説）」<sup>10</sup>のは、漢字で書くことがステータスだったからである。

そして漢字は一語一字の性格をもっている上、山田孝雄著『國語史・文字篇』<sup>53</sup>（第十卷）で述べられているように「一つの意義をあらはすに一の文字を以てするといふことが、本邦人に好まれてゐた」。

そうした、二字で表わされた語を一字で表現したいという欲求は、この「穴倉」にも強く働き、二字であった「穴倉」は合字され「窶」という文字になった。そして合字されたことによって「穴倉」は「窶」の文字に完全に吸収され、その後まったく使われなくなったと推測される。

「穴倉」という義をもつ用字から「窶」という文字に変化したとき、同時にこの文字はその義を理解させる機能を失った。また一般的になるほど広範囲で使われた文字にもならなかった。そして読めない、義も理解できない文字になったとき、一部の人たちに、形の似ている「窶」という文字ではないかと考えられるようになった。しかし誰にでも読むことの可能な「覚束なし」という文字使いが同じ時代にあつたため、使われることがなくなり消滅していったのではないかと考えている。

この稿を書くにあたって、かなりの量の作品を観察したが、慶長古活字本『源平盛衰記』で「おぼつかなし」と訓まれた「窶」の文字は、版本である米沢本・東洋文庫本・無刊記整版本の各『源平盛衰記』、弘治二年以前に書写されたと考えられる成實堂文庫本『源平盛衰記』、『南都異本平家物語』、『真字熱田本平家物語』でしか発見できなかった。また密接な関係をもつといわれる『真名本曾我物語』<sup>54</sup>や『神道集』<sup>55</sup>でも「穴倉」、「窶」、「窶」の用例を見ることができない。

『源平盛衰記』は、当初から読み物として書写されてきたために、「語り本」系統の諸本にくらべて、使われる文字が書写者によって変わっていく事がすくなく、「窶」が温存されたとかがえられるかも

しれない。

また『倭字攷』が典拠とした『平家物語』はその章題が「少将乞請」と書かれている。この「少将乞請」という章題は、旧高野本など覚一本系統で用いられているので、『真字熱田本平家物語』のように覚一本系統の本にも「寤」の文字が使われた本があったのではないかと考えている。『真字熱田本平家物語』では「おぼつかなし」の用字の65%が「寤」である。文明六年以前に仮名書きから真字にあらためた人にとってこの文字は親しい文字であったことが想像される。

「穴倉」から「寤」へ、そして「寤」へと変化していく現象は、平家物語諸本、特に「読み本系」と呼ばれる作品の中ではじまり、そこで変化しその過程を写本や版本、古字書のなかに残しているのではないか。武久堅「平家物語『旧延慶本』の輪郭と性格<sup>56)</sup>」では、『延慶本平家物語』と『南都異本平家物語』はともに「基本的には『旧延慶本』からの分岐」であろうと論述されている。その「旧延慶本」と考えられる本に「穴倉」の文字が使われていたのではないかと想像している。

また川瀬一馬著『古辞書の研究<sup>57)</sup>』436頁に『字鏡集』は「厳密な意味の集大成ではないにしても、各種のものを参照して集成してある事は確かであるとおもふ」とある。振り返って大胆な仮定をすれば、『字鏡鈔』の参照された一本に平家物語諸本の文字を収載した本があったのではないか。山田忠雄氏は、『類聚名義抄』の優柔不断な字形類聚主義から『字鏡鈔』による韻目順排列への改編、また『字鏡抄』のよ

り徹底した字形類聚への改変の試みについて次のように述べられている。

辞書の編輯といへば、古今かはらず 先行書の墨守、いささかの訂正、些少の形式改変のみを こととする 斯界において、これは また なんと 大胆な 改変・批判であろうか。吾人は、ここに 鎌倉時代人の いまだ 豪快と 新鮮とを うしなわぬ いぶきを まざまざと 感ずる。

「字鏡鈔と字鏡抄」(前出『本邦辭書史論叢<sup>25)</sup>』98頁)

こうした改変をめざした編者、もしくは原初本『字鏡集』を検索に便利なように類似をもつて標出字を配列した書写者が、鎌倉時代人の心情をもつともよく表現するとされる『平家物語』の中で使われている文字を収載したのではないか。今後の課題として、平家物語諸本の中で異体とされる文字を『字鏡鈔』『字鏡抄』にあたり、『字鏡集』と『平家物語』との関連も調べてみたいと考えている。

# 〔注〕

- (1) 古澤義則校注『応永書写延慶本平家物語』(昭10改造社刊の複製、白帝社、1961)
- (2) 川瀬一馬序、高橋貞一解説『延慶本平家物語』(汲古書院、昭58)
- (3) 「一」内は影印本の底本の部立、巻、頁と表(オ)、裏(ウ)を表わす。
- (4) 『時代別国語大辞典 室町時代編一』(三省堂、1985)
- (5) 松本隆信解題校訂、慶應義塾大学付属研究所斯道文庫編校『四部合戦状平家物語』(株式会社大安、1967)
- (6) 早川厚一・弓削繁・山下宏明編、内閣文庫蔵『源平闘諍録』(和泉書院、昭55)



- (7) 渥美かをる解説、国立公文書館蔵、慶長古活字本『源平盛衰記』（勉誠社、昭52）
- (8) お茶の水図書館成實堂文庫蔵本『源平盛衰記』（卷三十二 最終丁裏「弘治二年二月日校合」の朱書）  
岡田三津子著『源平盛衰記の基礎的研究』（研究叢書328、和泉書院、2005）26頁
- 卷五・卷六は「元和寛永古活字本の忠実な写しであることを確認した。従って、弘治二年以前に書写された伝本として成實堂本を取り上げる場合は、巻五・巻六を除外し、十九冊三十八巻現存とすべきである。」
- (9) 玉井幸助解説『真字熱田本平家物語』（育徳財団、昭和16、尊経閣叢刊）
- (10) 京都大学付属図書館蔵平松文庫蔵『平家物語』  
<http://edb.kuuhb.kyoto-u.ac.jp/exhibit/h500/h500cont.html>
- (11) 松本隆信解説『南都本・南都異本・平家物語』（古典研究会叢書第二期、汲古書院、昭47）
- (12) 市島謙吉編、長門本『平家物語』（国書刊行会、昭和49再版）
- (13) 赤間神宮本『平家物語』（赤間神宮企画、山口新聞社、昭60）
- (14) 国学院大学蔵『屋代本平家物語』（貴重古典籍叢刊、角川書店、1973）
- (15) 諸橋轍次著『大漢和辞典』卷四（大修館書店、1960）
- (16) 中村幸彦ほか編『角川古語大辞典』（角川書店、1982）
- (17) 『康熙字典』（中華書局出版、1958）
- (18) 『五音類聚四聲篇海』京都大学付属図書館蔵・近衛文庫  
<http://edb.kuuhb.kyoto-u.ac.jp/exhibit/k64/image/5/k64s0499.html>
- (19) 国立公文書館内閣文庫所蔵『龍龕手鑑』、杉本つとむ編『異体字研究資料集成』一期別巻二（雄山閣出版 昭50）
- (20) 檀國大學校附設東洋學研究所編『漢韓大辭典（10）』（檀國大學校出版部、2007）

- (21) 笹原宏之著『国字の位相と展開』（三省堂、2007）
- (22) 京都大學文學部國語學國文學研究室編『新撰字鏡』（臨川書店、1967）
- (23) 築島裕解説『圖書寮本類聚名義抄』（勉誠出版、2005）
- (24) 山田明穂解説『音訓篇立』（古辭書音義集成第十六卷、汲古書院、昭56）
- (25) 山田忠雄編、山田孝雄追憶『本邦辭書史論叢』（三省堂、1967）
- (26) 川瀬一馬解説、『字鏡抄』（古辭書叢刊第三回配本、雄松堂書店、昭49）
- (27) 中田祝夫編、尊経閣文庫蔵『天文十六年本字鏡鈔』（古辭書大系、勉誠社、昭57）
- (28) 『寛元本』、中田祝夫編『字鏡集白河本寛元本研究並びに総合索引』（古辭書大系、勉誠社、昭53）
- (29) 秋本守英編『龍大本字鏡集（和玉篇）』（龍谷大学善本叢書8、『思文閣出版、1988）
- (30) 『字鏡集』二十卷本（尊経閣影印善本集成21、八木書店、平11）
- (31) 『白河本』、中田祝夫編『字鏡集白河本寛元本研究並びに総合索引』（古辭書大系、勉誠社、昭53）
- (32) 内閣文庫蔵『篇目次第』、中田祝夫・北恭昭著『倭玉篇夢梅本篇目次第研究並びに総合索引』（古辭書大系、勉誠社、昭51）
- (33) 『拾篇目集』、北恭昭編、『倭玉篇五本和訓集成』（汲古書院、1994）
- (34) 『弘治二年本倭玉篇』、北恭昭編『倭玉篇五本和訓集成』（汲古書院、1994）
- (35) 中田祝夫・北恭昭共編『倭玉篇慶長十五年版研究並びに索引』（勉誠社、1981）
- (36) 北恭昭『漢和辞書の系譜における慶長整版倭玉篇―『字鏡』『音訓篇立』『大廣益會玉篇』との對比において―』（『國語學』第七十七集、昭和44年6月）
- (37) 川瀬一馬解説、『色葉字訓』（龍門文庫善本叢刊第三卷、勉誠社、昭



- 60)
- (38) 中田祝夫著『文明本節用集研究並びに索引』（勉誠社、昭54）
- (39) (一) 内の数字は影印本の頁数をあらわす。
- (40) 『黒本本節用集』（尊經閣善本影印集成20、八木書店、平11）
- (41) 新村出解題、帝国図書館蔵『伊京集』（白帝社、昭37）
- (42) 『永祿二年本節用集』、中田祝夫著『印度本節用集古本四種並びに総合索引』（勉誠社、昭49）
- (43) 国立国語研究所蔵本『慶長九年本節用集』、中田祝夫・根上剛士共編『印度本節用集和漢通用集他三種研究並びに総合索引』（勉誠社、1980）（1982）
- (44) 東京大学国語研究室蔵本『和漢節用集』、中田祝夫・根上剛士共編『印度本節用集和漢通用集他三種研究並びに総合索引』（勉誠社、1980）（1982）
- (45) 無窮会神習文庫蔵延宝八年刊本『節用集大全』、中田祝夫・木村秀次・小木曾悦雄編『惠空編節用集大全研究並びに索引』（古辞書大系、勉誠社、1975）
- (46) 『書言字考節用集』、中田祝夫・小林詳次郎編『書言字考節用集の研究並びに索引』（古辞書大系、勉誠社、2006）
- (47) 杉本つとむ著『異體字辨の研究並びに索引』（文化書房博文社、1972）
- (48) 遠藤嘉基・春日和男校注、高木市之介他監修、『日本霊異記』174頁（日本古典文学大系70、岩波書店、1967）
- (49) 『倭字攷』、杉本つとむ編『異体字研究資料集成第九卷』（雄山閣出版、昭和50）
- (50) 北村保雄・小川栄一編『延慶本平家物語』（勉誠社、平2）
- (51) 諸橋轍次・鎌田正・米山寅太郎著『広漢和辞典』（大修館書店、昭57）
- (52) 飛田良文監修、菅原義三編『国字の字典』（東京堂出版、平2）
- (53) 山田孝雄著『國語史・文字篇』第十卷（刀江書院、1937）
- (54) 角川源義編『妙本寺本曾我物語』（貴重古典籍叢刊3、角川書店、昭44）
- (55) 近藤喜博編『神道集』（角川書店、昭34）
- (56) 武久堅『平家物語「旧延慶本」の輪郭と性格―南都異本との関連―』（広島女学院大学論集）30（1980年12月）
- (57) 川瀬一馬著『古辭書の研究』（雄松堂出版、1982）
- 〔参考文献〕
- ・ 築島裕主編『字鏡（世尊寺本）』（古辭書音義集成第六卷、汲古書院、昭55）
- ・ 『下学集』、中田祝夫・林義夫編『古本下学集七種研究並びに総合索引』（風間書房、昭46）
- ・ 杉本つとむ著『異体字研究資料集成』（雄山閣出版株式会社、昭50）
- ・ 山内潤三「彰考館蔵・南都異本平家物語」、『高野山大学論叢』第二卷（昭41/10）
- ・ 山下宏明編『平家物語の生成』（汲古書院、平9）
- ・ 福田豊彦・服部幸造訳『源平闘諍録』（講談社学術文庫、2000）
- ・ 村上学「四部合戦本平家物語訓例索引稿一―神道集本文の整理―」（静岡女子短期大学研究紀要）14号（1967）
- （やぎ みどり） 文学研究科国文学専攻修士課程修了（指導・黒田 彰 教授）
- 二〇〇八年九月二十九日受理